

令和6年度探究的な学びを中核とした
「学びの変革」カリキュラム研究開発事業
先進的モデル地域：熊野町立熊野中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
熊野中学校	13	283
熊野第一小学校	22	538
熊野第三小学校	15	289

(R6.12.1現在で記入)

1 研究の概要

(1) 研究テーマ

本中学校区で設定した研究テーマは、「地域を愛し 地域に愛され 地域に生きる児童生徒の育成～小中のつながりをもたせたシビックプライドの醸成～」である。シビックプライドとは、都市に対する市民の誇りであり、「ここをよりよい場所にするために自分自身がかわっている」という当事者意識に基づく自負心でもある。このシビックプライドを醸成し、「ふるさと熊野」に誇りと愛情をもち、熊野で学んでよかったと思える教育を目指して、探究的な学習を推進していく。

具体的には、①小学校と中学校のふるさと学習のつながりが弱い現状があることから、令和5年度までの防災・減災学習にとらわれず、ふるさと学習における重複する学習内容について詳細に共有・検討し、中学校で更に学習が深まるようにすること。②中学校で行っている、ふるさと学習の一つである「組曲」を中学校3年間で探究のサイクルがまわる段階的な探究的な学習にしておくこと。以上の2点に取り組む。

これらの取組を通して、さらに探究的な学習を推進し、各校が育てたい資質・能力を育成していきたい。

(2) 特色

探究 × ふるさと学習

(3) 系統的に育成を目指す資質・能力

「メタ認知」、「協働」、「表現力」の三つの項目を3校共通のものとし、発達段階を踏まえ、各校で資質・能力を設定している。これを整理して【表1】に示す。

昨年度までの3年間の指定期間の中で取り組んできた「表現力」の育成に引き続き取り組みながら、それを生かし、シビックプライドも育成していく。

【表1】各校の育てたい資質・能力

メタ認知		協働		表現力	
(熊第一小)	(熊第三小)	(熊第一小)	(熊第三小)	(熊第一小)	(熊第三小)
自分で学ぶを進める力 振り返る力	向心	協働する力	思いやり	分かる・できる力	わかる・できる・やりたい力
(熊野中学校) 自己分析 スキルアップ		(熊野中学校) 協働		(熊野中学校) 表現力	

(4) 研究内容の概要

・探究的な学びを中核にしたカリキュラム開発

まず、小中のふるさと学習の整理を行った。昨年度の実践を【表2】に示す。これを踏まえて、このまま防災減災学習を継続すると小中の繰り返し学習になってしまうことが懸念された。そこで、中学校におけるふるさと学習の精査を行った。これを【表3】に示す。

【表2】令和5年度の学年別ふるさと学習の実施状況

	熊野第一小	熊野第三小	熊野中
6年 (中3)	国際理解教育 伝統・文化	伝統と 学校文化	熊野町の安全 伝統と 学校文化
5年 (中2)	防災・減災 町づくり	熊野町の農業 と生産者	熊野町の安全 伝統と 学校文化 熊野町の職業
4年 (中1)	福祉、町づくり、 キャリア教育	熊野町の安心 ・安全	伝統と 学校文化
3年	学校・地域 地域の伝統	熊野町の人・ もの・こと	

【表3】令和6年度の学年別ふるさと学習の実施状況

	熊野第一小	熊野第三小	熊野中
6年 (中3)	国際理解教育 伝統・文化	伝統と 学校文化	熊野町の安全 伝統と 学校文化
5年 (中2)	防災・減災 町づくり	地域社会の 発展	伝統と 学校文化 熊野町の職業
4年 (中1)	福祉、町づくり、 キャリア教育	熊野町の安心 ・安全	地域の活性化 伝統と 学校文化
3年	学校・地域 地域の伝統	熊野町の人・ もの・こと	

その後、中学校における各学年の総合的な学習の時間の取組を中心に各教科で教科横断的に取り組めることがないか精査を行った。しかし協議する中で、内容を繋げ深めていくのみではなく、目指す児童生徒の姿から教職員全体でカリキュラムを開発することが重要ではないかと意見が出た。そこで、来年度の計画を立てる際、学年会等で検討し、全教職員が協議できる場を設定した。

・PBLの考え方を取り入れた総合的な学習の時間の単元開発

本指定の伴走型支援を活用し、全教職員対象に校内研修で「探究とは何か」という共通認識を図った。その上で、各学年で今年度の総合的な学習の時間の計画を見直すなど協議を重ねた。協議の結果、今年度の防災減災学習は3年生のみで行うこと、1年生は単独でふるさと学習に取り組んだ後に組曲に取り組むこととした。(これを【表3】に示す。詳細は、実践事例で後述する。)組曲を探究的に進めていくために、①リーダー・小グループを中心とした活動形態にする、②相互フィードバックシートを導入する、③篠笛パートに「広報」活動を盛り込むことで、探究的な学習を目指した。

2 実践事例

第1学年において、単元「仕動！熊野を盛り上げ隊」を開発した。概要は次のとおりである。

【単元の目標】人口流出や少子高齢化の問題を抱える地域がもっと賑わうように、地域の伝統や活性化に尽力している人々の取組を調べたり、地域の魅力や課題を踏まえた地域のイベントを開発して発信したりする活動を通して、持続可能な地域の在り方について考え、地域のよさを大切にしながら当事者意識をもって生活していくことができるようにする。

【学習内容】

①熊野町の現状を踏まえ、よりよい町づくりについて考える。



②熊野町の魅力や課題について幅広く情報を集める。

- ・他地域の情報収集
(鹿児島県出水市立鶴住学園とオンラインで交流)
- ・アンケートを作成・実施

③アンケートを整理・分析し、クラスごとに提案資料を作成。

④熊野町の産業観光課に提案する。

「熊野町の自然をライトアップ」、「古民家カフェをつくる」、「熊野町の自然をいかしたイベントを企画」など一産業観光課の方から厳しい指摘やアドバイスをいただく。



もうすでに似たような取組を行っている団体があるよ。

古民家の改築には人手や物件が必要になるよ。

⑤熊野町の産業観光課からの指摘を踏まえた今後の課題を設定。
⑥熊野中学校の生徒として実行に移すために必要なことを考え、実行する。

◎実際に取組を行っている団体と連携。

→学校と地域のニーズが一致し、協力し取組むこととなる。

- ・デザインや広告等の取組
- ・きらら会の方とイルミネーションを作成



◎実現可能なイベントの考案

→カフェの代案として幅広い世代が交流できるイベント計画
・熊野東防災交流センターでイベントを企画

⑦取組内容等を発表するための資料を作成する。

⑧学校運営協議会の方に取組の報告やこれから行うイベントのプランを発表する。

→運営協議会の方から実現に向けてのアドバイスをいただく。

⑨熊野町の魅力や価値を伝えることについて話し合う。

⑩テーマ別何を伝えるか情報を収集する。

⑪スライド資料や発表原稿等を作成する。

⑫鹿児島県出水市立鶴住学園とオンラインで交流する。

・単元全体を振り返る。

・小学校段階で熊野町の魅力を理解していた児童が、中学校段階で熊野町の課題とも向き合い、生徒主体の課題発見・解決学習を進めることができた。

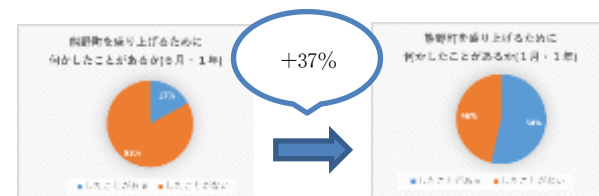
・昨年度よりも多くの地域の方との連携を図り、地域の方で学ぶ機会が増えた。

・教職員が探究について協議する場面が多く見られるようになった。

・中学校独自の質問紙調査の肯定的回答の割合を本事業開始時(令和6年6月)と現在(令和7年1月)とを比較したところ、上昇が見られた。(シビックプライドに関する調査:【図1】【図2】【表4】【表5】、「表現力」に関する調査:【表6】)

【図1】6月実施・中1年対象

【図2】1月実施・中1年対象



【表4】生徒質問紙調査 9月実施・熊野中全校対象

9月 生徒質問紙	あなたは、熊野町に愛着をもっていますか					肯定 意見
	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	
1年	29.6	35.7	24.5	6.1	4.1	65.3
2年	32.2	35.6	18.6	6.8	6.8	67.8
3年	38.2	44.1	14.7	2.9	0	82.3
全体	33.33333	38.46667	19.26667	5.26667	3.633333	71.8

【表5】生徒質問紙調査 1月実施・熊野中全校対象

1月 生徒質問紙	あなたは、熊野町に愛着をもっていますか					肯定 意見
	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	全く当てはまらない	
1年	35.7	38.1	17.9	7.1	1.2	73.8
2年	42.4	30.3	16.7	4.5	6.1	72.7
3年	47.4	37.2	9	3.8	2.6	84.6
全体	41.83333	35.2	14.53333	5.133333	3.3	77.03

【表6】生徒質問紙調査 6月・9月・1月実施・熊野中全校対象



(2) 課題

本中学校区の課題は2点ある。

1点目は、中学校における組組は、今年度、生徒主体で進めていくことで自分事として捉えることはできたが、未だ芸術的側面が強く、探究的な学習には至っていない点である。

2点目は、児童生徒同士の交流が少なかった点である。中学校区として小中連携をより深めていくには、教員だけでなく児童生徒同士の交流が必要である。

(3) 今後の改善方策等

組組については、第3学年を中心にカリキュラムを見つめ直し、探究的な学習を推進していく。次に、行事や授業交流等で児童生徒同士が交流できる場を設定する。更に学びを深めるために小中のカリキュラムを再度照らし合わせて熟考して、密な小中連携を図っていきたい。

3 研究の成果と課題等

(1) 成果